

附属小実習「水の音と器」についての考察

著者	高森 優
雑誌名	技を媒介とした学びに熱中する子どもの育成プログラム ; 2006
ページ	26-26
発行年	2006-03
出版者	静岡大学教育学部
URL	http://hdl.handle.net/10297/7137

では、無理があったことは否めない。しかしながら、鶴田教員からは「音から環境へ」という展開に興味をもった、理科の授業へと受け渡しができればよいという感想をいただいた。次に、参加学生の高森優および西村氏の感想を掲載する。

附属小実習「水の音と器」についての考察

音楽教育専修3年 高森 優

今回付属小で行なった授業の目標は、「身近な音の世界に気づくことにより、環境を再発見する」ことであった。卓上水琴窟や水滴製造器を使い、子どもたちに水の音について考えるきっかけを作った。この実践を今後発展していけるように、今回の反省点や課題について述べていきたい。まず今回の授業で子どもたちに伝えたかったことは、上にも述べたとおり「環境の再発見」である。そこへつなげるための手段として、卓上水琴窟で水の音の美しさを体験し、水滴製造器で普段聞き逃しがちな雨だれの音をじっくり聞くという活動を行った。この活動において、子どもたちは必死に4つの水の音の「違い」を聞き分けようとしていた。しかし、本来「違い」を感じてほしかったのは「雨の音2」の中での4つの器による音の違いであろう。水を受ける器によって多様な音ができるということに気づき、そこから発展して生活や自然の中にある器に目を向けさせるのがねらいであったと考える。したがって、この段階で少し子どもたちの観点と、こちら側の意図するねらいとに、差異が生じてしまったのではないだろうか。ここでは、まずは卓上水琴窟という子どもたちにとってなじみのない珍しいもので水の音に対して関心を引き、その後で山での雨の音を水滴製造器で聞くという活動までで一区切りつけるべきであったと考える。そしてさらに、同じ雨の音でも器によって違うという観点から、様々な器を使用してその音の聞き比べ活動を取り入れることが望ましかったであろう。また、今回は時間の関係で、目標である環境を考えるというところまでは到達しなかった。水の音を聞き比べたことに満足し、そのあとの身近な水の音に関する話には集中していなかったように思われる。水の音を聞いたことと、家庭での水の音や用途の間に関連性が感じられていなかったようにも思われた。やはり、ここでは時間をとって子どもたち自らが気づき、考えるという過程が必要であっただろう。そのためには、ふたつの段階を追って考えさせるべきであった。ひとつは、川や海など自然界にある水の音や器に目を向けさせ、自然環境について考えることである。もうひとつは、風呂や洗面所といった生活の中にある水の音や器に目を向けさせ、ものの大切さや人間の知恵について気づかせることである。このふたつについて別々にワークシートの欄を作り、子どもたちから気づいた点や意見を発表させるとよりよかったであろう。今後2時間扱いでこの問題を取り上げることを仮定すると、さらに発展した活動が考えられる。器の違いで多様な音が出ることに気づいたなら、子どもたちにそれぞれ器になりえるものを探したり作ったりして音を作るという創作の活動をすると音楽の授業との関連が持てる。さらに、洗濯機や風呂の変遷について考えれば社会の授業とも関連が持ててくるだろう。今回の題材は、様々な発展の可能性があると思われるので、この先教員になった際に活かしていきたい。